

2011年 9月1日・「下野新聞」では

悲しみ、不安に寄り添う

震災、原発も収録 本県から8人参加

「原爆詩一八一人集」など社会的アンソロジーを発行してきたコールサック社（東京・板橋）は、さまざまな場面で命の危機にひんする現代人の悲しみや不安に寄り添い、ともに踏み出すことを目指すアンソロジー「命が危ない 311人詩集」を刊行した。執筆者は全国から公募した311人で、東日本大震災被災者への見舞いと支援者への共感を込めた。本県関係は高田太郎、星野由美子さん（宇都宮市）ら8人。

同詩集は当初、21世紀初めの社会と日常生活、人生、内面の葛藤などにかかわる究極のテーマとして「命」を掲げ、作品を募集したが、大震災や原発事故が発生したため、急きょ、締め切りを延ばして関連詩も収録した。「こども」「仕事、世の中」など13章構成で、それぞれ解説付き。

「東日本大震災・津波など」の章は「遺体安置所」「逃げてください」などを収録。リアルタイムの状況と展望が描かれ、未曾有の事態・事実をしっかりと刻印しようとする姿勢が目立つ。これに対し、「原発」は以前から警告されてきた原発そのものの危険性や、東京電力福島第1原発事故の重大性を的確に表現した作品が並ぶ。

出産を通して悠久の時間と生活の危機感を描いた高良留美子さんの序詩「産む」と、子どもが遊んだ後にかわす、さりげない約束を詠んだ木島始さんの結びの詩「それじゃ 旅先で会った子どもたちへ」は本書を象徴する作品だ。困難な時代に生きるからこそ明日会えることを信じた切ない祈りが込められている。

と紹介されています。